

日蓮大聖人御書全集

いちねんさんぜんほうもん

一念三千法門

新版
357
ゝ
364

いちねんさんぜんほうもん

一念三千法門

しょうか ねん

正嘉2年('58)

37歳 さい

ほけきよう よきよう すぐ

法華經の余經に勝れたること、いかなることぞ。この經

いつしんさんがん いちねんさんぜん

やくおうぼさつ かんど

に一心三觀・一念三千ということあり。藥王菩薩、漢土に

しゅつせ てんだいだいし い

ほうもん さと たま

出世して天台大師と云われ、この法門を覚り給いしかども、

げんぎじつかん もんぐじつかん かくいざんまい しょうしかん じょうみょうしよ し

まず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四

ねんじよ しだいぜんもんとう おお

ほうもん と

いちねん

念処・次第禪門等の多くの法門を説きしかども、この一念

さんぜん ほうもん だん たま

ひやつかいせんによ ほうもん

三千の法門をば談じ給わず。百界千如の法門ばかりなり。

おんとしごじゅうしち

なつしがつ ころ

けいしゅうぎよくせんじ

もう ところ

御年五十七の夏四月の比、荊州玉泉寺と申す処にて、

みでし しょうあんだいし おし たも し かん もう ふみじつかん かみ
御弟子・章安大師に教え給う止観と申す文十卷あり。上

しじよう ひ たま ろくそく ししゅざんまいとう

四帖になお秘し給いて、ただ六即・四種三昧等ばかりなり。

ご かん いた じつきようじゆうじよう いちねんさんぜん ほうもん た そ

五の卷に至つて十境十乗・一念三千の法門を立て、「夫れ、

いっしん ぐ とううんぬん にひやくねん のち みようらくだいししやく

一心に具す」等云々。これより二百年の後に、妙楽大師釈

い まさ し しんど いちねん さんぜん ゆえ

して云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、

じようどう とき ほんり かな いっしんいちねんほうかい あまね うんぬん

成道の時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」云々。

いちねんさんぜん いっしんさんかん ほうもん ほけきよう いち かん じゆうによぜ

この一念三千・一心三観の法門は、法華經の一の卷の十如是

お もん ころ ひやつかいせんによ さんぜんせけんうんぬん

より起これり。文の心は、百界千如・三千世間云々。

いっしんさんかん もう よしゆう によぜ

さて一心三観と申すは、余宗は「如是」とあそばす。こ

ひがごと

にぎ 欠

てんだい

なんがく

おんぎ

し

ゆえ

れ僻事にて二義かけたり。天台・南岳の御義を知らざる故な

とうしゆう

てんだい

しよしやく

さんべんよ

くどく

り。されば、当宗には天台の所釈のごとく三遍読むに功德

勝

まさる。

だいいち

ぜそうによ

そう

によ

そう

しyou

たい

りき

第一に「是相如（この相は如なり）」と、相・性・体・力

いげ

じゆう

によ

い

によ

くう

ぎ

ゆえ

以下の十を「如」と云う。「如」というは空の義なるが故に、

じっぽうかい

みなくうたい

よ

かん

とき

わ

みすなわ

十法界、皆空諦なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち

ほうしんによらい

はちまんしせん

はんにや

もう

だいに

報身如来なり。八万四千または般若とも申す。第二に

によぜそう

そう

わ

み

しきぎよう

あらわ

「如是相（かくのごとき相）」。これ我が身の色形に顕れ

そう

みなけ

そう

しyou

たい

りきいげ

じゆう

たる相なり。これ皆仮なり。相・性・体・力以下の十な

十 法界みなけたい もう け ぎ よ かん

れば、十法界皆仮諦と申して仮の義なり。これを読み観ず

とき わ みすなわ おうじんによらい

げだつ もう

る時は、我が身即ち応身如来なり。または解脱とも申す。

だいさん そうによぜ そう ぜ によ い ちゆうどう もう

第三に「相如是（相は是に如す）」と云うは、中道と申し

ほとけ ほとしん ぎよう よ かん とき わ みすなわ

て仏の法身の形なり。これを読み観ずる時は、我が身即

ほとしんによらい ちゆうどう ほとしよう ねはん じやくめつ

ち法身如来なり。または中道とも法性とも涅槃とも寂滅

もう

とも申す。

みつ ほつ ぼう おう さんじん くう け ちゆう さんたい

この三つを法・報・応の三身とも、空・仮・中の三諦と

ほとしん はんにや げだつ さんとく もう さんじんによらい また

も、法身・般若・解脱の三徳とも申す。この三身如来全く

ほか わ みすなわ さんとくくきよう たい さんじんそくいっしん

外になし。我が身即ち三徳究竟の体にて、三身即一身の

ほんがく ほとけ

知

によらい

しようにん

さと

本覚の仏なり。これをしるを、如来とも聖人とも悟りと

い し

ぼんぷ

しゅじよう

まよ

もう

も云う。知らざるを、凡夫とも衆生とも迷いとも申す。

じっかい

しゅじよう

おのおのたが

じっかい

ぐそく

がつ

ひやつかい

十界の衆生、各互いに十界を具足す。合すれば百界な

ひやつかい

おのおのじゅうによ

ぐ

せんによ

せんによぜ

り。百界に各々十如を具すれば、千如なり。この千如是に

しゅじようせけん

こくどせけん

ごおんせけん

ぐ

さんぜん

ひやつかい

衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば、三千なり。百界

あらわ

しきそう

みなそう

け

ぎ

けたい

いち

と顕れたる色相は、皆総じて仮の義なれば、仮諦の一なり。

せんによ

そう

くう

ぎ

くたい

いち

さんぜんせけん

千如は、総じて空の義なれば、空諦の一なり。三千世間は、

そう

ほっしん

ぎ

ちゆうどう

いち

ほうもんおお

総じて法身の義なれば、中道の一なり。法門多しといえど

さんたい

さんたい

さんじんによらい

さんとくくきよう

も、ただ三諦なり。この三諦を、三身如来とも三徳究竟と

もう

も申すなり。

はじ

さんによぜ

ほんがく

によらい

お

しちによぜ

いったい

始めの三如是は、本覚の如来なり。終わりの七如是と一体

むにむべつ

ほんまつくきようとう

もう

ほん

にして無二無別なれば、「本末究竟等」とは申すなり。「本」

もう

ぶつしよう

まつ

もう

みけん

ほとけ

くかい

な

と申すは仏性、「末」と申すは末頭の仏、九界の名なり。

くきようとう

もう

みようかくくきよう

によらい

りそく

ぼんぷ

われ

「究竟等」と申すは、妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我

さべつな

くきようとう

びようどうだいえ

ほけきよう

らと差別無きを、「究竟等」とも「平等大慧の法華経」と

もう

も申すなり。

はじ

さんによぜ

ほんがく

によらい

ほんがく

によらい

さと

い

始めの三如是は、本覚の如来なり。本覚の如来を悟り出だ

たま

みようかく

ほとけ

われ

みようかく

ふぼ

ほとけ

し給える妙覚の仏なれば、我らは妙覚の父母なり。仏は

われ　う　我らが生むところの子なり。止しの一いちに云いわく「止しは則すなわち仏ほとけ

はは　かん　すなわ　ほとけ　ちち　うんぬん　たと　ひとじゅうにん

の母、觀かんは即すなわち仏ほとけの父ちちなり」云々。譬たとえば、人十人あら

めんめん　くらくら　たから　積　わ　くら　たから

んずるが、面々に蔵々に宝をつみ、我が蔵に宝のあるこ

し　餓　し　凍　し　いちにん

とを知らず、かつえ死しし、こごえ死しす。あるいは一人、こ

なか　賢　ひと　さと　い　くにん　つい

の中にかしこき人ありて、悟り出だすがごとし。九人は終に

し　おし　しよく　含

知らず。しかるに、あるいは教えられて食しよくし、あるいはくく

しよく　ぐ　いち　しかん　にじ　まさ

められて食するがごとし。弘の一ひとに「止觀の二字は、正し

もんたい　しめ　もの　ほんまつくきようとう

く聞き体を示す」と。聞かざる者は、「本末究竟等」もいたず

らか。

子なれども、親にまさること多し。重華はかたくなわし

き父を敬って賢人の名を得たり。沛公は帝王と成って後も、

その父を拝す。その敬われし父をば全く王といわず、敬

いし子をば王と仰ぐがごとし。それ、仏は子なれども、賢

くましまして悟り出だし給えり。凡夫は親なれども、愚癡に

していまだ悟らず。委しき義を知らざる人、「毘盧の頂上

をふむ」なんと悪口す。大いなる僻事なり。

一心三觀に付いて、次第の三觀、不次第の三觀というこ

とあり。委しく申すに及ばず候。この三觀を心得すまし

じようじゆ

けこんぎよう

さんがい

いっしん

成就したるところを、華嚴經に「三界は、ただ一心なり」

うんぬん

てんだい

しよすい

うみ

い

述

ほとけ

われ

そう

云々。天台は「諸水、海に入る」とのぶ。仏と我らと総じ

いっさいしゆじよう

りしやういち

隔

びやうどうだいえ

い

て一切衆生、理性一にてへだてなきを、平等大慧と云う

びやうどう

か

よ

なり。「平等」と書いては、「おしなべて」と読む。

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

ほうもん

しよきよう

絶

な

この一心三觀・一念三千の法門、諸經にたえてこれ無し。

ほけきよう

あ

じようぶつ

よきよう

法華經に遇わざれば、いかでか成仏すべきや。余經には

ろっかい

はっかい

じっかい

あ

ぐ

あ

六界・八界より十界を明かせども、さらに具を明かさず。

ほけきよう

ねんねん

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

いわ

かん

わ

法華經は念々に一心三觀・一念三千の謂れを觀ずれば、我が

みほんがく

によらい

さと

い

むみよう

くもは

ほっしやう

身本覺の如来なること悟り出だされ、無明の雲晴れて法性

つきあき

もうそう

ゆめさ

ほんがく

げつりん

潔

ふぼ

の月明らかに、妄想の夢醒めて本覺の月輪いさぎよく、父母

う

にくしん

ぼんのうぐばく

み

すなわ

ほんぬじようじゆう

の生むところの肉身、煩惱具縛の身、即ち本有常住の

によらい

そくしんじようぶつ

ぼんのうそくぼだい

如来となるべし。これを即身成仏とも、煩惱即菩提とも、

しょうじそくねはん

もう

とき

ほうかい

て

み

生死即涅槃とも申す。この時、法界を照らし見れば、こと

ちゆうどう

いちり

ほとけ

しゆじよう

いち

てんだい

ごとく中道の一理にて、仏も衆生も一なり。されば、天台

しよしゃく

いっしきいつこう

ちゆうどう

しゃく

の所釈に「一色一香も中道にあらざることなし」と釈し

たま

とき

じつぽうせかいみなじやつこうじようど

ところ

給えり。この時は、十方世界皆寂光浄土にて、いずれの処

みだ

やくしとう

じようど

い

ほけきよう

をか弥陀・薬師等の浄土とは云わん。ここをもつて法華經に

ほう

ほうい

じゆう

せけん

そう

じようじゆう

と

「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」と説き

たも
給う。

きよう

しんじ

かんねん

じようぶつ

さては経をよまずとも心地の観念ばかりにて成仏すべ

おも

いちねんさんぜん

かんねん

いつしんさんがん

かんぽう

きかと思いたれば、一念三千の観念も一心三観の観法も、

みようほうれんげきよう

ごじ

おさ

みようほうれんげきよう

ごじ

妙法蓮華経の五字に納まれり。妙法蓮華経の五字は、ま

われ

いっしん

おさ

そうら

てんだい

しよしやく

た我らが一心に納まつて候いけり。天台の所釈に「この

みようほうれんげきよう

ほんじじんじん

おうぞう

せんぜ

によらい

しようにく

妙法蓮華経は本地甚深の奥蔵、三世の如来の証得したも

しやく

みようほうれんげきよう

とな

うところなり」と釈したり。さて、この妙法蓮華経を唱う

とき

しんちゆう

ほんがく

ほとけあらわ

われ

み

こころ

くら

たと

る時、心中の本覚の仏顕る。我らが身と心をば蔵に譬え、

みよう

いちじ

いん

たと

てんだい

おんしやく

ひみつ

おうぞう

ひら

妙の一字を印に譬えたり。天台の御釈に「秘密の奥蔵を発

く。これを称しょうして妙みょうとなす。権実ごんじつの正軌しょうきを示しめす。故ゆえに号ごうし

て法ほうとなす。久遠くおんの本果ほんがを指さす。これを喩たとうるに蓮はちすをもつ

てす。不二ふにの円道えんどうに会えす。これを譬たとえうるに華はなをもつてす。

声こえ、仏事ぶつじをなす。これを称しょうして経きようとなす」と釈しゃくし給たまう。

また「妙みょうとは不可思議ふかしぎの法ほうを褒美ほうびするなり。また妙みょうとは

十界じっかい・十如じゅうによ・権実ごんじつの法ほうなり」云々。うんぬん

「経きようの題目だいもくを唱となうると観念かんねんと一いちなること、心得こころえがたし」

と愚癡ぐちの人ひとは思おもい給たまうべし。されども、天台てんだい、止しの二にに

「而に於お説默せつもく」と云いえり。説せつとは経きよう、默もくとは観念かんねんなり。また、

しきようぎ いち い く とうえん

四教義の一に云わく「ただ功の唐捐ならざるのみにあらず、

よ り かな よう うんぬん てんだいだいし もう

また能く理に契うの要なるかな」云々。天台大師と申すは、

やくおうぼさつ だいし せつに かん に しやく たも もと

薬王菩薩なり。この大師、「説而観而」と釈し給う。元よ

てんだい しよしやく いんねん やつきよう ほんじやく かんじん ししゆ おんしやく

り、天台の所釈に、因縁・約教・本迹・観心の四種の御釈

ししゆ じゆう し いち 品 み ひと いっこうほんじやく

あり。四種の重を知らずして一しなを見たる人、一向本迹

旨 いっこうかんじん おもて

をむねとし、一向観心を面とす。

ほけきよう ほう ひ いんねん ほうせつ だん いた

法華経に法・譬・因縁ということあり。法説の段に至つ

しよぶつしゆつせ ほんかい いっさいしゆじようじよぶつ じきどう さだ われ

て、諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定む。我の

いっさいしゆじようじきしどうじよう いんねん さだ たま

みならず一切衆生直至道場の因縁なりと定め給いしは、

だいもく

てんだい

げん

いち

しゆぜん

しようぎよう

え

題目なり。されば天台、玄の一に「衆善の小行を会して、

こうだい

いちじよう

き

こうだい

もう

のこ

いんどう

たも

広大の一乗に帰す」と。「広大」と申すは、残らず引導し給

もう

しやくそんいちにんほんかい

の

たも

とうがく

うを申すなり。たとい釈尊一人本懷と宣べ給うとも等覺

いげ

あお

きよう

しん

しよぶつしゆつせ

以下は仰いでこの經を信ずべし。いわんや、諸仏出世の

ほんかい

本懷なり。

ぜんしゆう

かんじん

ほんかい

あお

ししゆ

禪宗は「觀心を本懷と仰ぐ」とあれども、それは四種の

いちめん

いちねんさんぜん

いつしんさんがんとう

かんじん

ほけきよう

かんじん

一面なり。一念三千・一心三觀等の觀心ばかり法華經の肝心

だいもく

じゆうによぜ

お

だいもく

なるべくば、題目に十如是を置くべきところに、題目に

みようほうれんげきよう

お

うえ

しさい

およ

とうせい

妙法蓮華經と置かれたる上は、子細に及ばず。また当世の

ぜんしゆう

きようげ べつでん

い たも

おも

す

禅宗は、「教外に別伝す」と云い給うかと思えば、また捨て

えんがくきようとう

もん

ひ

うえ

じつきよう

もん

られたる円覚経等の文を引かるる上は、実経の文におい

おんいろ

およ

そうろう

ちしや

どくじゆ

かんねん

なら

て御綺えに及ぶべからず候。智者は読誦に観念をも並ぶ

ぐしや だいもく

とな

り

かな

べし。愚者は題目ばかりを唱うとも、この理に会うべし。

みようほうれんげきよう

われ

しんしよう

そう

いっさいしゆじよう

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生

しんしよう

はちよう

びやくれんげ

な

おし

たも

ほとけ

みこと

の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の御詞

むし

このかた

わ

しんちゆう

しんしよう

まよ

しようじ

るてん

なり。無始より以来、我が身中の心性に迷つて生死を流転

み

いま

きよう

あ

たてまつ

さんじいそくいち

ほんがく

によらい

せし身、今この経に値い奉つて三身即一の本覚の如来を

とな

あらわ

げんぜ

ないししようじようぶつ

そくしんじようぶつ

唱うるに顕れて現世にその内証成仏するを、即身成仏

もう し ひかり はな げゆう じょうぶつ もう らいせ
と申す。死すれば光を放つ。これ外用の成仏と申す。「来世
さぶつ え
に作仏することを得ん」とは、これなり。

りやく きようだい あ げん いちぶ おき いっぺん
「略して経題を挙ぐるに、玄に一部を収む」とて、一遍

いちぶ うんぬん みようほうれんげきよう とな とき しんしょう によらいあらわ
は一部なり云々。妙法蓮華経と唱うる時、心性の如来顕

みみ たぐ むりようあそうぎこう つみ めつ いちねん
る。耳にふれし類いは、無量阿僧祇劫の罪を滅す。一念も

ずいき とき そくしんじょうぶつ しん しゆ な
随喜する時、即身成仏す。たとい信ぜざれども、種と成り、

じゆく な かなら よ じょうぶつ みようらくだいしい
熟と成り、必ずこれに依つて成仏す。妙楽大師云わく「も

しゆ しや みみ へ えん な じゆん
しは取、もしは捨、耳に経て縁と成り、あるいは順、ある

い つい よ だつ うんぬん にちれんい
いは違、終にこれに因つて脱す」云々。日蓮云わく「もし

は取、もしは捨、あるいは順、あるいは違」の文、肝に銘ず

ことば

ほけきよう

ほう き

とう と

る詞なり。法華經に「もし法を聞くことあらば」等と説か

すで

き

と

れたるは、これか。既に「聞くことあらば」と説かれたり。

かんねん

じようぶつ

ほう

かん

觀念ばかりにて成仏すべくば、「もし法を觀ずることあら

と

てんだい

ごりようけん

じゆうによぜ

い

じっかい

ば」と説かるべし。ただ天台の御料簡に十如是と云うは十界

じっかい

いちねん

ことお

じっかい

しゅじよう

い

きた

なり。この十界は、一念より事起こり十界の衆生は出で来

じゆうによぜ

みようほうれんげきよう

りけり。この十如是というは、妙法蓮華經にてありけり。

しやばせかい

にこんとくどう

くに

いぜん

もう

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、

まさ

し

しんど

うんぬん

いっさいしゅじよう

み

ひやつかいせんによ

「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に百界千如・

さんぜんせけん おさ いわ あ ゆえ みみ ふ

三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これを耳に触るる

いっさいしゅじょう くどく う しゅじょう いっさいしゅじょう もう

一切衆生は功德を得る衆生なり。一切衆生と申すは、

そうもく がりやく いっさいしゅじょう うち うじょう ひじょう

草木・瓦礫も一切衆生の内なるか〔有情・非情〕。そもそ

そうもく なん こんぺいろん い いっそう いちもく いちりやく いちじん

も草木は何ぞ。金埤論に云わく「二草・一木・一礫・一塵、

おのおのいちぶつしよう おのおのいちいんが えん りょう ぐそく とううんぬん

各一仏性、各一因果あり。縁・了を具足す」等云々。

ほっしほん はじ い むりょう しよてん りゆうおう やしや けんだつば

法師品の始めに云わく「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・

あしゆら かるら きんなら まごらが にん ひにん びく

阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽、人と非人、および比丘・

びくに みようほけきょう いちげいつく き ないしいちねん ずいき

比丘尼、妙法華經の一偈一句を聞いて、乃至一念も随喜せ

われ みな あのくたらさんみやくさんぼだい き さず うんぬん

ば、我は皆ために阿耨多羅三藐三菩提の記を授く」云々。

ひにん そう にんかい ほか いっさいうじようかい こころ
非人とは、総じて人界の外、一切有情界とて心あるものなり。
いわんや人界をや。

ほけきよう ぎようじや によせつしゆぎよう かなら いつしよう うち ひとり
法華經の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人
のこ じようぶつ たと はるなつ た つく わせ おくて

も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・晩
いちねん うち かなら おき ほつけ ぎようじや

あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の行者も、
じよう ちゆう げこん かなら いつしよう うち しやうとく げん

上・中・下根あれども、必ず一生の中に証得す。玄の
いち い じよう ちゆう げこん みなきべつ あた うんぬん

一に云わく「上・中・下根、皆記別与う」云々。
かんじん じようぶつ おも ひと いつぼう欠 ひと

観心ばかりにて成仏せんと思う人は、一方かけたる人なり。
きようげべつでん ざせん ほっしほん い やくおう

り。いわんや、教外別伝の坐禅をや。法師品に云わく「薬王

おほ ひとあ ざいけ しゆつけ ぼさつ どう ぎよう

よ。多く人有つて在家・出家にて菩薩の道を行ぜんに、も

ほけきよう けん もん どく じゆ しょ じ くよう う

しこの法華經を見・聞・読・誦・書・持・供養することを得

あた まさ し ひと よ ぼさつ

ること能わずんば、当に知るべし、この人はいまだ善く菩薩

どう ぎよう きようてん き う

の道を行ぜず。もしこの經典を聞くことを得ることあら

すなわ ぼさつ どう ぎよう うんぬん かんじん じようぶつ

ば、乃ちよく菩薩の道を行ず」云々。觀心ばかりにて成仏

けん もん どく じゆ い

すべくんば、いかでか「見・聞・読・誦」と云わんや。こ

きよう もつぱ もん ほん

の經は専ら「聞」をもつて本となす。

きよう あくにん によにん にじよう せんだい きら

およそこの經は、悪人・女人・二乗・闡提を簡わず。故

かいじようぶつどう い びようどうだい え い

に、「皆成仏道」とも云い、また「平等大慧」とも云う。

ぜんあくふに じゃしよういちによ き

ないしようじようぶつ

善悪不二・邪正一如と聞くとところに、やがて内証成仏す。

ゆえ そくしんじようぶつ もう いつしよう しようとく ゆえ いつしよう

故に、即身成仏と申す。一生に証得するが故に、一生

みようかく い ぎ し ひと と とな ほとけ

妙覚と云う。義を知らざる人なれども、唱うれば、ただ仏

ほとけ よろこ たも われ すなわ かんぎ しよぶつ

と仏とのみ悦び給う。「我は即ち歡喜す。諸仏もまたし

うんぬん ひやくせんあ くすり くち 飲 やまいい

かなり」云々。百千合わせたる薬も口にのまざれば病愈

くら たから も ひら 知 飢

えず、蔵に宝を持てども開くことをしらずしてかつえ、

ふところ くすり たも の 知 し

懷に薬を持っても飲まんことをしらずして死するがご

によいほうしゆ たま ごひやくでしほん きよう とく

とし。如意宝珠という玉は、五百弟子品のこの経の徳もま

たかくのごとし。

かんじん

なら

よ

もう

およ

かんねん

観心を並べて読めば申すに及ばず。観念せずといえども、

はじ

もう

しよいいしよほうによぜそうにようんぬん

よ

とき

始めに申しつるごとく「所謂諸法如是相如云々」と読む時は、

によ　くう　ぎ

わ

み

せんごう

受

そう

如は空の義なれば、我が身の先業にうくるところの相・

しよう　たい　りき

ぐ

はちじゅうはちし

けんわく

はちじゅういつぽん

性・体・力、その具するところの八十八使の見惑、八十一品

しわく

くう

ほうしんによらい

しよいいしよほうによぜそううんぬん

の思惑、その空は報身如来なり。「所謂諸法如是相云々」と

読

け

ぎ

わ

み

せんごう

う

よめば、これ仮の義なれば、我がこの身、先業によつて受け

そう

しよう

たい

りきうんぬん

ぐ

じんじゃ

わく

たる相・性・体・力云々。その具したる塵沙の惑ことごと

そくしんおうじんによらい

しよいいしよほうによぜ

よ

とき

く即身応身如来なり。「所謂諸法如是」と読む時は、これ

ちゆうどう

ぎ

じゆん

ごう

う

そう

しようとう

中道の義に順じて、業によつて受くるところの相・性等

うんぬん

したが

むみようみなしりぞ

そくしんほっしん

によらい

云々。それに随いたる無明皆退いて、即身法身の如来と

こころ

ひら

じゅうによぜ

さんてん

読

さんじんそくいっしん

心を開く。この十如是、三転によまるること、三身即一身・

いっしんそくさんじん

ぎ

みつ

わ

ひと

ひと

一身即三身の義なり。三つに分かるれども一つなり。一つ

さだ

みつ

に定まれども三つなり。